

高校生の対人意識における曖昧化と両価感情

Obscuration and Ambivalent Feeling of a High School Student's Personal Consciousness

作 田 誠一郎

Seiichiro SAKUTA

概 要

政治の混迷や若者の不安定な雇用等，若者を取り巻く社会的状況は厳しさを増している。また企業に人材育成の余裕が無くなる状況下において，若者個人の即戦力や職場環境に適応するためのコミュニケーション能力等は重視されている。本調査は，地方高校生を対象として若者のコミュニケーションや社会的な適応にかかわる対人意識を明らかにするために量的調査を実施して，その回答結果を分析した。

その結果，対人観および友人観ともに打算的でナルシズム的な個人主義的傾向が認められ，かつ他者の言動を注視しながら同質的な親友関係を求めている傾向も認められることから，対人意識としてアンビバレンスな状態にあることを指摘した。また性別の特徴として，女子は少人数の友人関係を重視しており，他者からの評価に対して気遣う傾向にあった。さらに，男子は他者に対して一定の距離感をもっていることが明らかとなった。

1. はじめに

若者に対する社会の期待と注視は，少子化や就職難のなかでより一層高まっているように思われる。一方でコミュニケーション能力の不足や社会性の欠如等，若者に対する社会のイメージは厳しさを増しているようである。その評価の対象となる若者自身も，一昔前の若者とは異なり年功序列や終身雇用といった日本型経営の就職が期待できず，日本型のメリトクラシー（よい学校に進学すればよい会社に就職でき，安定したよい人生が送れる）が崩れたことで当面の目標すらもてない時代のなかで生きている。一層の自己責任と成果主義が求められる新自由主義的な社会システムのもとで，若者の意識はどのような特徴を有するので

あろうか。

本論では，高校生を対象として対人意識の特徴を明らかにする。また2010年度に実施した同様の調査結果と比較することで若者の対人意識の経年変化についても考察したい。調査対象としては，2010年度に調査したX県内の全日制の公立高等学校および私立高等学校の中から8校を抽出し，2011年10月から12月にかけて1年生から3年生のすべての在学学生を対象に調査票を配布して記入してもらう集合調査法を用いた。全体のサンプル数は5,240である。また男女比は，女性2,452（46.8%），男性2,788（53.2%）である。

2. 問題の所在と分析枠組み

日本において少子高齢社会の到来とともに，将

来を担う若者に対する大人社会の関心は高まっているように思われる。これまでも各時代の大人たちは、若者に対してさまざまな眼差しを送り続けてきた。1950年代の「太陽族」や「みゆき族」を代表とするような新たなライフスタイルに対する大人社会からの批判や大人社会に対抗するような学生運動および「ツッパリ」などの形態も各時代の若者の特徴としてあげられる。一方では、「モラトリアム人間」(小此木1978)や「オタク」などの社会的な対抗とは一線を画す若者論も登場した。

2000年以降は、新自由主義的な経済構造の浸透とともに格差が目されるなかで、山田(2004)の「希望格差社会」や三浦(2005)の「下流社会」、本田(2008)の「軋む社会」などの悲観的な若者論も注目されている。また近年では、古市(2011)の著書『絶望の国の幸福な若者たち』において、将来に対する「希望」はないが現状に対する「不満」もない現代の若者の心情を指摘する若者論も見受けられる。

他方、中高生を対象とした人間関係に関する研究についてもさまざまな研究領域から有益な研究成果が蓄積されている。特に社会学的なアプローチにおける近年の先行研究に着目すると、学校の「空気」に注目した本田(2011)の研究では、勉強や進学といった「目的性」という価値観に對等する「共同性」(他者との関係)に着目して、今日の学校社会における強制的性格と閉塞的性格を前提とした若者の対人意識を分析している。

また土井(2012)は、統計データを用いて若者の宿命主義的な人生観の浸透を指摘している。ここで指摘されている宿命主義は、2000年以降の新自由主義の浸透と結びついており、自由意志による選択の入る余地が無い人生観を指している。そして、この新自由主義における人びとの価値観の多元化とエコノミーの原則による人物評価の物差しの一元化が、コミュニケーション能力や人間力の涵養を測定すると指摘している。

これらの先行研究からもわかるように今日の若者は、社会から過度に求められるコミュニケーション能力や周囲の空気を読み取りながら迅速に対応できる対人関係の能力に対して強迫的な感情を甘受しているのではないだろうか。

一方で若者に対する大人たちは、新自由主義に基づく成果と責任が強く求められるなかで仕事上の関わりのみが中心となり、若者の評価において業績主義的な側面を重視する傾向にあるように思われる。しかし、大人たちが若者の関係や理解を深めることで、一元的な物差しによる若者の評価を多元的な人物評価に転換することができるかもしれない。また、このような多元的で複眼的な評価は、若者の潜在的な創造力やコミュニケーション力を顕在化させる契機になると思われる。そして、現代の若者がどのような対人意識を持ちながら人間関係を構築しているのかは、大人たちにとって家庭や職場等で若者と関わるうえで要諦となる。そのためには、若者がどのような対人意識を有しているのかを明らかにすることが重要である。

そこで本研究では、若者の対人意識を知るために2011年度に実施した高校生に対する量的調査の回答結果を分析したい。

3. 対人意識の特徴と経年比較を中心とした対人関係の変化

本調査では、対人関係に関して自らの性格を問う項目(10項目)と友だち関係における項目(12項目)を用意した。それぞれの特徴を分析することで、若者の自己評価および友人関係について明らかにしたい。

(1) 若者の対人関係に関する自己評価からみる特徴と学校生活

高校生に対して、対人関係に関して自らの性格を問う設問からその特徴をみてみたい。表1-1は、各質問項目に対する回答を「そう思う」4点、「どちらかといえばそう思う」3点、「どちらかといえばそう思わない」2点、「そう思わない」1点として得点化し、性別および学年別に平均値を算出して分散分析を行った結果である。

表1-1から、女子は男子とくらべて「一人で好きなことをやっている方が人づきあいよりも好きだ」「自分がどう見られているか気になって疲れる」「常に自らの行動を振り返り改善しようと思う」「人から認められないと不安である」などの質問項目について相対的に高いことがわかる。また男子は、「他人に同情するとバカをみる」や

表1-1 対人観の分散分析(性別)

	女性	男性	F 値	
一人で好きなことをやっている方が人づきあいよりも好きだ	2.48	2.42	6.0	*
自分がどう見られているか気になって疲れる	2.61	2.45	36.5	**
他人に同情するとバカをみる	1.95	2.05	14.9	**
他人に対して寛容であることが大切だ	3.32	3.23	14.1	**
能力のない人は良い生活ができなくて当然だ	1.72	2.05	159.0	**
たいていのことなら他人と同じくらいできる	2.67	2.68	0.5	
人から何か言われると簡単に決心を変えてしまう	2.34	2.31	2.3	
常に自らの行動を振り返り改善しようと思う	2.93	2.80	37.2	**
親しい人たち以外の人の考え方や行動に関心がない	2.04	2.10	5.2	*
人から認められないと不安である	2.74	2.56	48.8	**

**p<0.01 *p<0.05

「能力のないひとは良い生活ができなくて当然だ」など、女子にくらべて高い結果となった。つまり、女子は対人関係における自己評価として他者からの評価に対して敏感であり、さらにその評価に対して気疲れや不安を感じていることがわかる。一方の男子は、他者に対して能力主義的な評価や一定の距離感を図る傾向が認められる。

次に、同様の質問項目において学年別に分散分析を行った結果を表1-2に示した。

有意差の認められた質問項目についてしてみると、「一人で好きなことをやっている方が人づきあいよりも好きだ」において1年生は他学年よりも相対的に低いことがわかる¹⁾。同様にこの傾向は、「親しい人たち以外の人の考え方や行動に関心がない」にも認められた。

さらに、各項目が潜在的にどのような意識を有しているのかを捉えるために因子分析を行った。その結果、表1-3に示したように自分自身を評価する項目に関しては3つの因子が抽出された。

第1因子は、「人間は結局自分が一番大切なのだから、むやみに他人に同情したりするとバカをみると思う」「能力のない人は、よい生活ができなくて当然だ」「私は一人で好きなことをやっているほうが、人づきあいをするより好きだ」「私は親しい人たち(友だちや家族など)以外の人の考え方や行動に関心がない」の4項目で構成されており、「ナルシシズムの個人主義傾向」と呼ぶ。第2因子は「私は人から認められないと不安である」「人と付き合うとき自分がどう見られているか気になって疲れる」「私は人から何か言われると簡単に決心を変えてしまう」の3項目で構成されていることから「他者指向的傾向」と呼ぶ。第3因子は、「私はたいていのことなら他の人と同じくらいできる」「常に自らの行動を振り返り改善しようと思う」「人間には誰も弱いところがあるので、間違いを犯した時にはお互いに寛容であることが大切だ」の3項目で構成されていることから、「再帰的傾向」(自らの振る舞いを振り返り

表1-2 対人観の分散分析(学年別)

	1年生	2年生	3年生	F 値	
一人で好きなことをやっている方が人づきあいよりも好きだ	2.39	2.48	2.47	4.4	*
自分がどう見られているか気になって疲れる	2.52	2.54	2.51	0.3	
他人に同情するとバカをみる	2.01	1.97	2.03	1.9	
他人に対して寛容であることが大切だ	3.29	3.28	3.24	1.8	
能力のない人は良い生活ができなくて当然だ	1.86	1.91	1.93	2.5	
たいていのことなら他人と同じくらいできる	2.68	2.64	2.71	2.6	
人から何か言われると簡単に決心を変えてしまう	2.34	2.34	2.29	1.5	
常に自らの行動を振り返り改善しようと思う	2.85	2.85	2.89	1.2	
親しい人たち以外の人の考え方や行動に関心がない	2.01	2.09	2.12	6.6	**
人から認められないと不安である	2.66	2.65	2.62	0.6	

**p<0.01 *p<0.05

表1-3 対人観の因子分析

	第1因子	第2因子	第3因子
他人に同情するとバカをみる	.650	.033	-.018
能力のない人は良い生活ができなくて当然だ	.462	.058	.016
一人で好きなことをやっている方が人づきあいよりも好きだ	.458	.195	-.023
親しい人たち以外の人の考え方や行動に関心がない	.411	.037	-.116
人から認められないと不安である	.273	.676	.074
自分がどう見られているか気になって疲れる	.072	.618	.198
人から何か言われると簡単に決心を変えてしまう	.039	.438	-.046
たいていのことなら他人と同じくらいできる	-.109	.120	.475
常に自らの行動を振り返り改善しようと思う	.086	-.134	.385
他人に対して寛容であることが大切だ	-.083	.122	.313
寄与率 (%)	11.22	11.21	5.34

注) 主因子法、バリマックス回転による。因子負荷0.3以上を太字とした。

表1-4 性別にみた対人観(因子得点)の分散分析

	女性	男性	F 値	
ナルシズム的個人主義傾向	0.07	-0.06	32.1	**
他者指向的傾向	-0.10	0.09	67.5	**
再帰的傾向	-0.05	0.04	28.8	**

**p<0.01 *p<0.05

軌道修正を図る傾向)と呼ぶ。

抽出された因子の傾向から、ナルシスティックな個人主義的傾向を示す一方で周囲を気遣い自らを社会環境に適応させようと努める傾向も認められた。この対人観の分析結果から、矛盾する傾向が併存していることがわかる。

上記の因子分析から得られた因子得点において分散分析を行ったものが表1-4である。結果をみるとすべての因子が1%水準で有意差が認められ、女子は男子とくらべて「ナルシズム的個人主義的傾向」の値が高く、反対に男子は女子とくらべて「他者指向的傾向」および「再帰的傾向」が高いことがわかる。

また表1-5は、対人観における因子得点とその他(友人観および対人観の項目以外)の質問項

目の相関関係をみたものである。この結果から周囲に対する期待や評価については、「再帰的傾向」や「他者指向的傾向」においてプラスの相関が認められる。また「ナルシズム的個人主義傾向」においては、周囲からの期待や理想の進路への意識がマイナスの相関を示しており、一方では学校生活に孤独感を感じており、学校自体にマイナスのイメージをもっていることがわかる。

(2) 若者の友人観

表2-1は、各質問項目に対する回答を「そう思う」4点、「どちらかといえばそう思う」3点、「どちらかといえばそう思わない」2点、「そう思わない」1点として得点化し、性別および学年別に平均値を算出して分散分析を行った結果であ

表1-5 対人観における因子と各質問項目における相関関係

	ナルシズム的個人主義傾向	他者指向的傾向	再帰的傾向
周囲から期待されると力が発揮できる	-.044**	.009	.235**
学業に対するの努力は評価してもらいたい	-.007	.217**	.265**
多くの困難があっても理想の進路に進みたい	-.110**	-.008	.248**
学校生活で孤独を感じている	.292**	.290**	-.067**
学校以外での生活の方が充実している	.250**	.010	-.076**
今の学校に誇りを持っている	-.235**	-.011	.190**

**p<0.01 *p<0.05

表2-1 友人観の分散分析 (性別)

	女性	男性	F 値	
数少ない人と長くつきあい続ける方だ	3.09	2.85	88.9	**
何でも安心して話せる友だちがいない	1.59	1.71	24.2	**
人のつきあい方で使い分けをしている	2.70	2.62	9.0	**
人のつきあい方には損得がある	2.77	2.83	5.2	
人が困っている時には多少損をしても助ける	2.98	2.93	5.0	
一人でいるとたまたま寂しくなる	2.75	2.37	163.6	**
友だちから上から目線でものを言われるとむかつく	2.91	2.92	0.1	
友だちつきあいの中で場の空気を読むことは重要だ	3.48	3.37	30.1	**
仲の良い友だちが悪い事をしたら注意できる	3.05	2.90	43.6	**
自分と性格の合わない人とはあまりつきあいたくない	2.86	2.78	9.1	**
人との約束を破っても気にならない	1.35	1.49	52.0	**
自分だけが浮いてしまうのではないかと不安だ	2.48	2.36	20.5	**

**p<0.01 *p<0.05

る。

表2-1から女子は男子とくらべて、「数少ない人と長くつきあい続ける方だ」「一人でいるとたまたま寂しくなる」「自分だけが浮いてしまうのではないかと不安だ」などの項目において相対的に高いことがわかる。一方、男子は「何でも安心して話せる友だちがいない」「人との約束を破っても気にならない」が女子とくらべて高い結果となった。

この結果から、女子は少数の友人関係を重視しており、その少数の友人関係に起因する濃密な関係性における寂しさや浮いてしまうことへの不安感が強くあらわれている。また男子は女子とくらべて、友人関係においても前述した対人観と同様に対人意識において一定の距離感を図っている傾向が認められる。

次に、同様の質問項目を用いて学年別の分散分析を行った結果を表2-2に示した。表2-2から「友だちつきあいの中で場の空気を読むことは重要だ」の設問においては、2年生において最も高い値となっている。また「自分と性格の合わない人とはあまりつきあいたくない」の設問については、2年生および3年生とくらべて1年生が低い値となっている²⁾。

次に各項目の因子分析を行ったところ、結果として表2-3に示したように4つの因子が抽出された。すなわち第1因子は、「仲の良い友だちが悪いことをしたら注意できる」「人が困っている時には自分が多少損をしても助ける方だ」がプラスの負荷量を示しており、「何でも安心して話せる友だちがいない」「人との約束を破っても気にならない」がマイナスの負荷量を示していること

表2-2 友人観の分散分析 (学年別)

	1年生	2年生	3年生	F 値	
数少ない人と長くつきあい続ける方だ	2.95	2.97	2.95	0.2	
何でも安心して話せる友だちがいない	1.64	1.65	1.67	0.5	
人のつきあい方で使い分けをしている	2.63	2.65	2.70	2.3	
人のつきあい方には損得がある	2.82	2.76	2.83	2.5	
人が困っている時には多少損をしても助ける	2.95	2.95	2.95	0.0	
一人でいるとたまたま寂しくなる	2.56	2.56	2.53	0.4	
友だちから上から目線でものを言われるとむかつく	2.94	2.93	2.87	2.3	
友だちつきあいの中で場の空気を読むことは重要だ	3.41	3.46	3.37	6.9	**
仲の良い友だちが悪い事をしたら注意できる	2.97	2.98	2.97	0.0	
自分と性格の合わない人とはあまりつきあいたくない	2.76	2.84	2.85	4.2	*
人との約束を破っても気にならない	1.41	1.42	1.45	1.8	
自分だけが浮いてしまうのではないかと不安だ	2.45	2.42	2.37	2.6	

**p<0.01 *p<0.05

表 2-3 友人観の因子分析

	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
仲の良い友だちが悪い事をしたら注意できる	.448	.045	.110	-.061
何でも安心して話せる友だちがいない	-.419	.022	.180	.133
人が困っている時には多少損をしても助ける	.395	-.113	.171	.243
人との約束を破っても気にならない	-.374	-.023	.106	-.025
友だちから上から目線でものを言われるとむかつく	-.005	.465	.121	.116
自分と性格の合わない人とはあまりつきあいたくない	-.067	.459	.169	.047
友だちつきあいの中で場の空気を読むことは重要だ	.282	.385	.129	.123
人とのつきあい方には損得がある	.068	.289	.510	.025
人のつきあい方で使い分けをしている	.011	.180	.505	.074
自分だけが浮いてしまうのではないかと不安だ	-.262	.129	.100	.607
一人でいるとたまらなく寂しくなる	.088	.111	.010	.415
寄与率 (%)	7.616	6.699	6.093	5.989

注) 主因子法, バリマックス回転による。因子負荷0.3以上を太字とした。

から、「親友的対人意識」と呼ぶことにする。第 2 因子は、「友だちから上から目線でものを言われるとむかつく」「自分と性格の合わない人とはあまりつきあいたくない」「友だちつきあいの中で場の空気を読むことは重要だ」がプラスの負荷量を示していることから「同質的対人意識」と呼ぶ。第 3 因子は、「人のつきあい方には損得がある」「人のつきあい方で使い分けをしている」のそれぞれがプラスの負荷量を示していることから、「打算的対人意識」と呼ぶ。最後の第 4 因子は、「友だちと遊んでいるとき、自分だけが浮いてしまうのではないかと不安になることがある」「一人でいるとたまらなく寂しくなる」がプラスの負荷量を示していることから「孤立回避的対人

意識」と呼ぶ。

この因子分析の結果から、友人観において同質的な何でも打ち明けられる親友関係を求めている一方で、孤立することを避けるために打算的に友人関係を築いている傾向が認められる。

次に、上記の因子分析から得られた因子得点から性別を中心に分散分析を行ったものが表 2-4 である。この結果をみると、「独立回避的対人意識」を除いた因子において 1%水準で有意差が認められ、男子にくらべて女子に「親友的対人意識」「同質的対人意識」「打算的対人意識」の値が高いことがわかる。

表 2-5 は友人観における各因子得点と他の質問項目における相関関係を示している。表 2-5

表 2-4 性別にみた友人観 (因子得点) の分散分析

	女性	男性	F 値	
親友的対人意識	0.10	-0.09	89.8	**
同質的対人意識	0.05	-0.05	28.2	**
打算的対人意識	0.09	-0.08	73.4	**
孤立回避的対人意識	-0.01	0.01	0.4	

**p<0.01

表 2-5 友人観における因子と各質問項目における相関関係

	親友的 対人意識	同質的 対人意識	打算的 対人意識	孤立回避的 対人意識
自分の行動や結果はすべて責任をもつべき	.213**	.110**	.094**	.050**
資格は将来の就職に有利である	.233**	.140**	.053**	.078**
多くの困難があっても理想の進路に進みたい	.256**	.045**	.034**	.038**
学校生活で孤独を感じている	-.343**	.080**	.167**	.297**

**p<0.01 *p<0.05

から、「親友的対人意識」に関しては、将来に対する責任や展望に対してプラスの相関が認められ、学校生活の孤独感マイナスの相関が認められる。また「孤立回避的対人意識」については、学校生活の孤独感についてプラスの相関が認められた。

結果として「親友的対人意識」は、責任感や将来へのビジョンを見据えた傾向が他の因子よりも高くプラスの相関を示していることがわかる。さらに他の因子とくらべてみると、実際の学校生活における孤独感もマイナスの相関を示していることから、親友の存在がさまざまな面で学校生活におけるプラスの影響を与えているようである。一方「孤立回避的対人意識」においては、学校生活における孤独感が他の因子とくらべても高いことがわかる。孤立を避ける意識が実際の学校生活における孤独感と直結していることが知られる。

これまでの分析結果をまとめてみたい。対人関係を中心とした自己評価について、女子は他者からの評価に対して気疲れや不安を感じており、男子は他者に対して一定の距離感をもっている。また因子分析の結果から、「ナルシシズム的個人主義傾向」「他者指向的傾向」「再帰的傾向」の3つの因子が認められ、性別において女子は「ナルシシズム的個人主義的傾向」の値が高く、反対に男子は「他者指向的傾向」および「再帰的傾向」が高いことがわかった。

友人関係を中心とした対人意識に関しては、女子は少数の友人関係を重視することから浮いてしまうことへの不安感や寂しさが特徴としてあらわれており、男子は友人関係において一定の距離感を図っている傾向が認められた。因子分析の結果では、「打算的対人意識」「親友的対人意識」「同質的対人意識」「孤立回避的対人意識」の4つの因子が抽出されたが、性別の分散分析において女子は男子にくらべて「親友的対人意識」「同質的対人意識」「打算的対人意識」のそれぞれが有意に高い値を示していた。また対人観および友人観の学年別の特徴は、学齢が増すとともに対人意識において距離感が増しているようである。この要因として、受験や就職等において個々人の進路に意識が傾くことも影響しているかもしれない。

4. 経年比較に見る対人意識の変化と実態

対人意識の特徴を知るために経年比較を用いて探ってみたい。経年比較における対人意識については、2010年に本調査と同様の質問項目を用いて調査している。2010年の調査の概要として、2010年10月から同年11月にかけて本調査対象と同じ県内の公立高等学校および私立高等学校の合計41校（2年生奇数クラス）を対象に調査票を配布して記入してもらって集合調査法を用いた。全体のサンプル数は4,265であり、男女比は女子2,053（48.1%）、男子2,212（51.9%）である。そのデータから本調査対象となった8校の生徒（613名）を抽出して、本調査において前年度に同様の調査を実施した生徒（565名）と比較した結果についてみていきたい³⁾。

図1-1は対人観における各質問項目に対する回答を「そう思う」4点、「どちらかといえばそう思う」3点、「どちらかといえばそう思わない」2点、「そう思わない」1点として得点化して平均値を算出した結果である。また図1-2は、友人観において対人観と同様に平均値を算出した結果を示している。

図1-1および図1-2からわかるように、すべての質問項目において大きな変化は認められない。しかし、次にあげる他の質問項目においては経年における変化が認められた。

図1-3は、周囲からの期待に対するポジティブな影響をみたものである。「そう思う」「どちらかといえばそう思う」に注目すると、2010年度は2つの選択肢を合わせて42.9%が「思う」と回答していたが、2011年度には過半数の52.3%に高まっている。また図1-4は、「将来のよい生活のために今の生活を犠牲にしてもよい」という堅実的傾向を知るための質問項目の回答結果である。

「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を「思う」としてしてみると、2010年度は38.9%であったものが52.7%にまでポイントが高くなっている。将来の進路を迎える3年生において堅実的な傾向が認められる結果となった。

しかし、学業に絞ってみるとその堅実的な真面

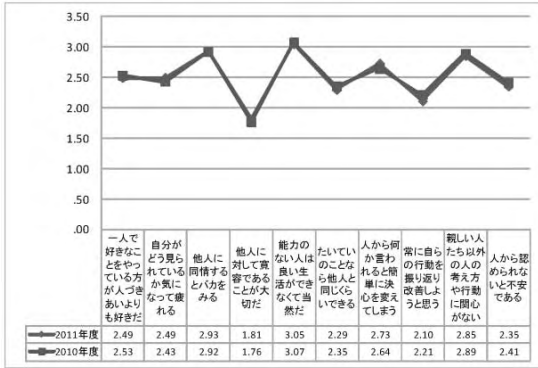


図1-1 対人観における平均値比較

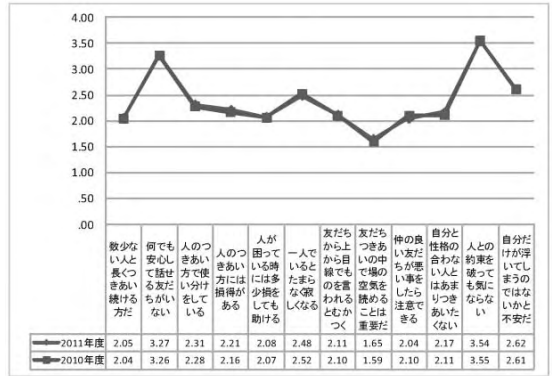
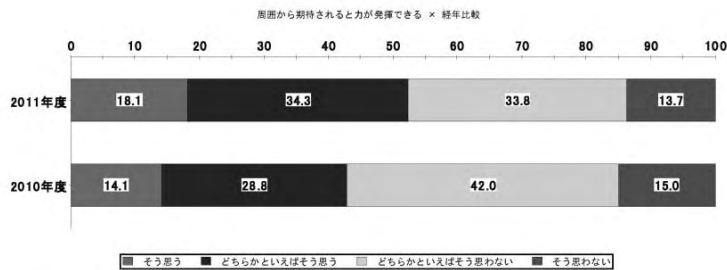
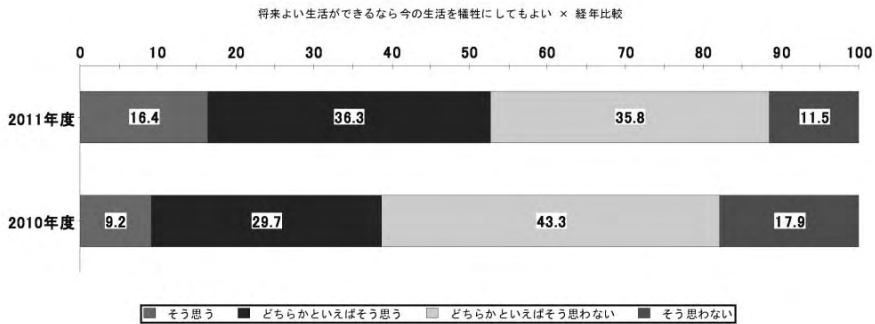


図1-2 友人観における平均値比較



$\chi^2(df=3, N=1312) = 12.3694, p < .05$

図1-3 周囲からの期待に対する意識



$\chi^2(df=3, N=1313) = 31.5004, p < .01$

図1-4 堅実的傾向

目さの傾向は異なるようである。図1-5は「頑張って勉強するよりもほどほどの成績で卒業できればよい」という設問の結果を示したものである。その結果から、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を「思う」としてしてみると、2010年度は38.7%であった「思う」が43.1%に高まっている。つまり、高校3年生において将来の岐路に立つ学生の堅実さと諦めのアンビバランスな傾向があらわれる結果となった。

5. おわりに

本調査から高校生の対人意識には、ますます激化する成果主義や自己責任といったネオリベリズムの進展がその背景として読み取れる。男子の他人に対する能力主義的で一定の距離感を図る対人意識や女子の疲れを伴いながら他人を気遣う対人意識は、ネオリベラル化する大人社会の負の人間関係を反映しているようである。つまり、市場

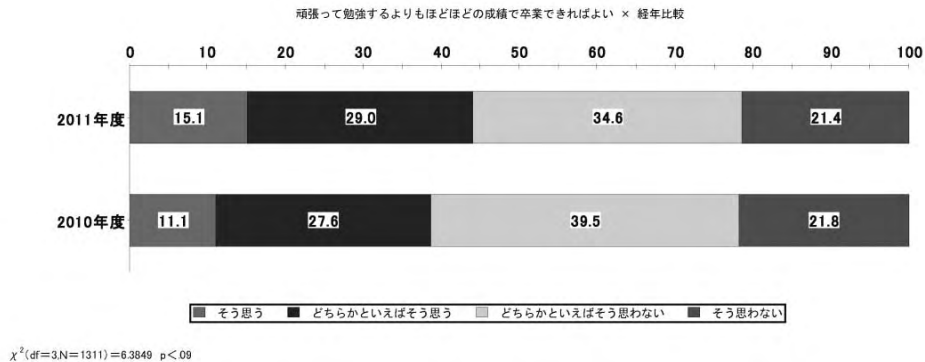


図1-5 現実的努力傾向

至上主義的な価値観の蔓延や流動化する雇用形態（非正規雇用等）のもとで築かれる人間関係において、適度な距離感を図りながら過度に周囲の環境に順応していく（または反省的な視点から自己を再構築していく）ことは、常態的な疲労感や恒常的な空気を読む（気配りをする）ことによる不安感を強いられる。しかし一方では、型にはまらない独創的な思考が求められ、高度消費社会に蔓延するナルシズム的な個人主義的な対人意識を高めている。

このような両価感情を伴う若者の対人意識は、対人関係上のひずみとして精神面においても対人関係の形成上においても若者に影響をおよぼすかもしれない。しかし、現状においてこのような若者の対人意識上の両価感情は、若者自身も自覚しないほど潜在化し曖昧化されている。この若者のアンバランスな対人意識は、今後の学校社会や職場の人間関係において注視せざるを得なくなるだろう。

注

- 1) Tukey HSD (a) 法を用いたところ、2年生と3年生に有意差は認められなかったが、1年生と2年生 ($p=0.02$)、3年生 ($p=0.04$) のそれぞれに有意差が認められた。
- 2) Tukey HSD (a) 法を用いたところ、「友だちつきあいの中で空気を読むことは重要だ」では、2年生に対して1年生 ($p=0.09$) および3年生 ($p=0.01$)、「じぶんと性格の合わない人とはあまりつきあいたくない」では、1年生に対して2年生 ($p=0.04$)、3年生 ($p=0.03$) であり

それぞれに有意差が認められた。

- 3) 本調査において、「3年生の方のみ答えてください。2年生の時に本調査と同じ内容調査に回答した方（2年の時に奇数クラス）は、①にマークしてください。」の質問項目を用意して経年比較を実施した。

引用・参考文献

- 大塚英志, 2004, 『「おたく」の精神史-1980年代論』講談社現代新書。
- 小比木啓吾, 1978, 『モラトリアム人間の時代』中公叢書。
- 土井隆義, 2012, 『若者の気分-少年犯罪〈減少〉のパラドクス』岩波書店。
- 古市憲寿, 2011, 『絶望の国の幸福な若者たち』講談社。
- 本田由紀, 2008, 『軋む社会-教育・仕事・若者の現在』双風社。
- 本田由紀, 2011, 『若者の気分-学校の「空気」』岩波書店。
- 三浦展, 2005, 『下流社会』光文社新書。
- 山田昌弘, 2004, 『希望格差社会-「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房。